

その後のお姫さま

## 白雪姫の場合

木原美香子

「ホーッ！」

王妃様はため息をつきました。

まだお昼前だというのに朝から十七回目のため息です。侍女達はそっと目配せをかわしました。王妃様は退屈だったのです。広いお城にたった一人取り残されて、先代の王様と王妃様はとうの昔に天国へ召されておりました。子どもたちは王子二人に王女二人の四人でしたが、それぞれ勉強にいそがしくお母さまの暇つぶしの相手をしているわけにはいきません。それに二十年前に比べて世の中も進みましたので、王妃様がうっかり口を出すわけにはいきません。何か言おうものなら、「お母様は古い、もう時代は変わっているのです」の一言で片付けられてしまいます。

子供たちは天文学、科学、フランス語、イタリア語、数学、礼儀作法、社交ダンスにピアノにギター、歌の歌い方、手紙の書き方、乗馬までスケジュールはぎっしり、顔を合わせるのは朝と晩のお食事の時だけです。王妃

様は四人の子どもたちがお互いにお母さまのひざのとりっこをしたり、甘えてだっこをせがんだりした頃をなつかしく思い出すのでした。

王様といえばこれまたまわりの国々のお歴々とおつきあいに忙しく、お城にいらっしゃる時はほとんどありません。ごくたま～にお城の廊下ですれ違うことがありますと、王様はろくに顔も見ずに、「奥や、元気におるかな？」と言いながら、気のないキスをなさいます。そのキスはたいていの場合、鼻の頭とか耳の横に着地するのです。「あーあ、昔は楽しかったわ。小さなお家に七人のお友だちと住んで、朝から晩まで私のやることは山ほどあったわ。みんな私を必要としてくれたし、愛してくれたわ。魔女にねらわれるようなスリルもあったし、、、それに比べて、今はなんてつまらない毎日でしょう」王妃は十八回目のため息をつきました。

王妃の結婚前の名前は "Snow White" そう、

あの有名な『白雪姫』だったのです。もともと一目見ただけで心を奪われ、結婚を申し込むようなところのある王子でしたから、結婚してからはそれはそれは大変でした。趣味や性格は全く違いましたから甘いハネムーンが過ぎると、二人の間にはなんとなくすきま風が吹き始めたのです。それでも子どもたちの幼い頃は良き父と母としてその役目を果たしてきました。しかし今となってはそれも思い出話。もと白雪姫こと王妃様はむなしい毎日を送っていました。

しばらくもの思いにふけていた王妃様の憂鬱な顔が、突然ぱっと輝きました。「そうだわ、魔女のお母さまから逃げて小人のおじ様達に助けられたラッキーガールの私ですもの、やる気さえ出せば幸せがまたつかめるはず、、、」

王妃様はすぐに外出の仕度をはじめました。森に住む小人達を訪ねてみようと思いたったのです。

森の中を馬で行くうちに王妃様は少し息切れがしてきました。なにしろ二十年間お城で過ごすうちに、王妃にはすっかり貫禄（贅肉とも言いますが）がついていたのです。レースのハンカチで汗をふきふき馬を進めるうちに、やがて小さな家が見えてきました。

「よかった!! まだ記憶は衰えていないわ」つぶやきながらとびらを開けて中に入ると、

「やっぱり! 」と思わず声に出してしまいました。そして満足そうににっこりとしたのです。目の前には二十年前初めて訪れた時と同じに、食器は出しっぱなしで、ベッドも起きたままの乱雑な光景が広がっていました。王妃はさっそくエプロンをかけ、腕まくりをすると働き出しました。しかし三十分も経たないうちに腰が痛くなり、王妃は一息入れたくなりました。きれいなカップを選んでお茶を入れると王妃は小さなイスに腰掛けようと思っただけでした。「たしか前に来たとき、これに座って壊してしまったっけ」そこ

でポーチに出て階段に腰掛けることにしました。

天気のいい日でした。小鳥達のさえずり、葉ずれの音、チラチラと踊る木漏れ日、森は昔とまったく変わっていません。空気はかぐわしく、花や緑の香りにあふれていました。「なんてステキ! これを忘れていたなんて、私の二十年間はそんなに忙しいものだったのかしら。」王妃はお茶を一口飲みました。森の空気にひたっていると、少女の頃に帰れるような気がしました。しかし現実には動かしがたいもの、「悩みをかかえた、中年の女・・・それが私」王妃はつぶやくと白いものの混じり始めた髪を直し、たち上がりました。そして小さな台所で、夕方お腹を空かせて帰ってくる小人達のために食事を作り始めました。

それはお城で口にするものに比べたら、本当に質素で簡単なものでしたが王妃は満足でした。台所を粉だらけにしてパンも焼きました。二階にあがって床を掃き、ベッドを整え

枕をパンパンとたたいてふくらませました。

外へ出て花をつむとテーブルの上に飾り、みんなの帰りを待ちました。長いこと待っているうちに王妃は眠くなりました。久しぶりに家事をしたためでしょう、気持ちよさそうにうつらうつらしてましたがそのうちぐっすりと寝込んでしまいました。

夢の中で王妃は白雪姫に戻り、森の中を軽やかに走っていました。小人達と踊ったり、歌をうたったりしました。体は軽く、息も切れません。小人達が帰ってきたとき、王妃の顔には幸せな笑みが浮かんでおりました。小人達は眠っている王妃に気がついて驚きましたが、すぐにあの白雪姫だと気がついて、そばに寄ってきました。疲れている様子を見て起こさぬように気をつけながら

「姫も年をとったもんじゃ」

「ほんとに、あのかわいかった姫が今は立派な王妃様だ」

「あの頃は毎日が本当に楽しかった。仕事を終えて帰ってくると姫が一生懸命温かい食事

を用意して待っていてくれた」

「それにあの歌声、思い出しても幸せな気持ちになるなあ」

「本当に無邪気でわしらが守ってやらなければ魔女にも簡単にだまされてしまう子だったなあ」

小人達はひとしきり王妃の寝顔をながめていましたが、そのうちの一人がそっと声をかけました

「白雪姫や起きなさい、風邪を引くよ」王妃は目を開けると七人の小人たちが帰っているのですっかりあわてました。

「まあ、私ったらすっかり寝込んでしまったわ、こんなつもりじゃなかったのに、、、ご無沙汰しておりました。おじ様たちちっともお変りなくて、、、すぐにスープを温めますから」そう言いつつ王妃はいそいそと火をおこし、スープのお鍋をあたためなおしました。

夕食のあと久しぶりに美しい唄声が小屋を

満たしました。時は楽しく過ぎていきましたが、そのうち、一人が王妃にたずねました。

「ところで白雪姫や、何かあったのかい？」  
王妃はしばらくためらっていましたが、思いきって話し始めました。

「私、毎日が退屈でしかたがないの。王様も子供たちも私のことをまともに見てくださらないの。ここへ来れば何か良い知恵を貸していただけたらと思ったのよ。」

皆はうなづいたり、顔を見合わせたりしながら王妃の話聞いていました。やがて、長老が静かにはなし始めました。

「姫や、いやもう、お妃様だったな。姫がここへ来たときのことは今でもよく覚えているよ。姫は本当にやさしくて、人を疑うこともなく、わしら小人をみても恐れもしないし嫌いもしなかった。それどころかわしらを尊敬し愛してくれた、一緒に楽しく暮らせるように一生懸命じゃった。本当にかわいい少女だったよ。わしらは今でも姫の幸せを願っている。姫がそんな悲しい思いをしていると、

わしらも悲しくなる」

「それではどうぞ私に知恵を貸してください、魔女から逃れるために忠告を与えて下さったように」

もっとも妃は美しい帯やクシの為に、その忠告を三回とも忘れてしまったことは二十年の時の彼方に置いてきてはいましたが。

小人は言いました。

「それではきくが、姫は何か得意なものはないかな」

「とくいなもの？」

「そうじゃ例えばえーと、そうそう、手芸とか料理とか『まあこれはさっきいただいたスープでわかる気がするが』いやいやこちらのこと、絵を描くとか、あるいは草花を育てるのとか、いろいろあるじゃろう」

「そうね」妃は考えこんでしまいました。

「お城というところは割にきゅうくつなところで私のやっていることといえば、王様の話し相手とか、、、『これは最近あまりないけど』近所の国とのおつきあいや、お客様の接

待、ダンス、ドレスの注文、食事のメニューに OK を出したり、ピクニックの計画をたてたり、、、あらあら、私ったら何ひとつ満足にできないのねエ」

妃は今さらのようにのんきで能力のない自分に気がつきました。

「これでは王様や子供たちが私を忘れても仕方がないわ、何かをする前にまず何かをできるようにならなくては」

「そうとも、そうとも、それにな（オホン）これは少し言いにくいのだが、姫は二十年前に比べてその少々、何というか少しふくよかになられたのではないのかな？」

「そうなの！私。若いときは子育てに忙しかったから良かったけれど、ここ2~3年は退屈でつまみ食いのクセがついてしまった。家族からも相手にされなくてイライラしたり、寂しかったり自分に腹がたったりすると、かわりに何かを食べてしまうの。いやね、食べてばかりよ。そのうえダンスも乗馬も面倒になって体を動かす事が少なかったからいつの

まにかこんなに太ってしまって、まあ、どうしましようこんなにみっともない私のこと、王様はきっとあきれていらっしゃるわ」

妃は思わず涙声になりました。ふくよかなバラ色のほおは、やさしい顔をさらに穏やかに見せ、えくぼの浮かんだ手もまあるいなだらかな曲線でできた体も、皮肉なことに妃を本当に悩みなど知らない女性に見せていました。妃は小人達に頼みました。

「おねがい、私をもとの見軽ではしっこい、ダンスや動くことの好きな、歌うことの好きな白雪姫にもどして！そんな魔法のクスリおじ様たち知りませんか？」

小人たちは思わずクスッと笑ってしまいました。「姫や、それはムリというもの、わしらだってそんなものは持ってないよ。まずやせるには動くこと、必要以上食べないこと、これを守ればやせるはず」

「でも今さら動くなんて考えただけでも息切れしそうよ」

「・・・・・・・・」

「姫や、始めっからそんなことを言っでは何も力を貸すことはできないよ」長老は厳しく言いました。王妃は恥ずかしくなって下をむいてしまいました。下を向くと、ふと床の汚れに気がつきました。

「そうだわ、昔のように毎日ここに来てお掃除をしたり、お洗濯をしたり、皆のお世話をさせてください。ただ踊ったり馬に乗ったりでは目的がないの。私は誰かの役にたちたいの！」

小人たちは妃の申し出を快く受け入れてくれました。

さっそく次の朝食がすむと、王妃は勇ましい格好でお城を出ました。もちろんハイヒールのかわりにペタンコ靴をはき、ドレスのかわりに乗馬ズボンとシャツ、王様をご覧になったら卒倒しそうです。髪はリボンでひとつにまとめました。王妃は小人の家を目指します。ふうふう言いながら森の小屋へ着くと、休む間もなく家事を終え夕方にはまた小

走りに城へもどるのです。のんびりと過ごしてきた王妃にとって、始めは辛く苦しい毎日が続きました。しかし妃はグッとこらえました。

『スリムになって王様をふりむかせてみせる！』その一念だけでがんばれたのです。そうこうしているうちに、ふくよかな顔がすっきりとし、二重顎は消えスリーサイズがみるみるうちに落ちてきました。靴がブカブカになり、ベルトの穴も移動します。

ある朝、ふと王様が顔を上げ、「妃やその、最近少し変わったね」とおっしゃった時、妃は心のなかで「やったあ！」と歓声を上げました。しかしすました顔で「あら、王様なにがです？」と聞き返しました。

「その、何とというか、そう、若々しくなった」王様はおっしゃいました。王妃はますます張り切りました。

そうして一年程過ぎたある日、妃は若い頃のドレスを衣装部屋で見つけると、おそろお

その手を通して見ました。するとどうでしょう、何もかもぴったりとしています。妃は嬉しくなって歌いながらワルツのステップをふみました。遠くからその姿を見つけた王様は家来に「あれは誰かね？」と聞いたほどでした。家来は王様にそっと耳打ちします。

「王様あれは、いえあの方は失礼ながらお妃様でいらっしゃいます」王様はすっかり驚いて今度はしっかり見るために近くまで行くことにしました。

本当にそれは王妃でした。あまりの変わりように、王様はしばらくボーッとただ見つめていました。あんなに太っていつも退屈そうにしていたお妃が、今軽やかにワルツのステップをふみながら、楽しそうに歌っているのです。

「白雪姫！」王様は心のなかで二十年前を思い出しました。もちろん二十年の歳月はまごうことなく妃の顔にしわを刻み、髪には白いものをおいてはありましたが、それでも妃は本当に惚れぼれする程チャーミングだったの

です。

美しくなれたという喜びと、毎日小人たちの手伝いをする心の張りが、妃を内側から輝かせていたのです。王様は妃のそばに寄り、声をかけました。

「白雪や」

妃は驚いてステップをやめ、恥ずかしそうに微笑みました。上気した頬はピンクの薔薇のよう、瞳は黒耀石のよう、王様は思わず妃の手をとり庭に誘いました。そして夕方までお二人はゆっくりと語り合いました。

次の朝、食事もそこそこに妃は森に飛んでいきました。

「小人のおじ様たち、やったわ！大成功！王様は昨日私をまた見つけて下さった。そして昔のようにやさしく手を取り歩いて下さった。ありがとうみんな、本当にありがとう」

小人たちは妃が涙をながして感謝の言葉を述べるのを聞くと、心の底から良かったと思いました。



「白雪姫は本当に寂しかったのじゃな。それにしても世の殿方はどうしてうわべの美しさに魅かれるのだろう、この子はこんなに無邪気でかわいらしい少女のような心を持ち続けているのに。そして王様に対する愛も変わらないというのに。

それにしてもどうして人は、うわべの姿にまどわされるのだろうか？ 太った中年の女性が若々しい理想と燃える心を内に秘めていたり、髪がうすくなった初老の男性が少年のころと変わらぬ夢を追い求めていたりするのにまったく気がつかない事が多い。わしらのように姿がみにくいとその心根も恐ろしいと思われがちだし、美しい姿形には美しい心、清い魂が宿っていると錯覚してしまう。頭の良いもの、姿の美しいもの、能力のあるものばかりがもてはやされ、そうでないものはたとえ、どんなに素晴らしい理想、やさしい心根、清い魂を持っていても見過ごされてしまいがちだ。それに人は目に見えるものは簡単に受

け入れるが、目に見えない心はなかなか見つけること、理解することはしない。本当に育てて磨いてやらなければならないのは、目に見えるものより、目に見えないものだということに。姫や、これからはその無邪気さを良い方へ生かして、周囲の人に幸せをわけておやり。そうすればいつまでも尽きることのない幸せがいつもおまえと共にあるだろう」  
長老はそう言うとお妃を抱いて祝福してやりました。

それからのお妃は城のなかだけでなく、城の外の人達の心も良く知ろうと努めました。そして適切な助言を王に与えましたので、お妃は王にとって家庭においても、公務においても無くてはならない真のパートナーになったのです。そしてまわりの人々の幸せを手伝いをしていると、不思議なことにそれはいつも王妃の心に新たな喜びをもたらすのでした。そして王妃は生きている限り本当に幸せになれたのでした。